

「武雄市での研修を通じて」

1. 研修内容

今回、地方自治体実地研修として、佐賀県武雄市にて1週間研修を行った。研修内容としては、組織機構・財務説明、税徴収業務、道の駅での業務、農業、消防業務、河川業務、リサイクルセンター業務、特産物に関する業務、観光課業務、及び職員の方との意見交換であった。毎日様々な業務を体験し、また多くの立場の方と話す機会が設定されており、有意義な研修であった。研修に伺うにあたっては、組織機構として「レモングラス課」、「いのしし課」等の名称を用いている点や、市民病院の民間移譲問題で市長選挙が行われた点、「佐賀のがばいばあちゃん」のロケ地としての取り組みが行われている点に注目して臨んだ。研修を通じ、多くの取り組みを市全体で意欲的に取り組んでいらっしやることが伺え、大変参考になった。

2. 研修の中から

研修では多くの場所を訪れ、学ぶ機会に恵まれたが、特に印象に残った点について考える。

○道の駅「黒髪の里」

黒髪の里での取り組みであるが、農家の方と提携して地元の食材をうまく活用していた。当日の朝に収穫されたものを販売している点が最大の強みであるが、観光目的に加えて地元の方に利用されており、道の駅の新たな役割を垣間見た思いがした。さらに、この施設の売り上げが年々増加している点も興味深かった。客単価を上げることよりも、訪問人数を増やすことで売り上げを伸ばしており、商品調達のための農家提携に加えて、訪問者増加への取り組みが重要であることが理解できた。併設する食事処「なな菜」では、朝届けられた食材を用いて30-40種の惣菜を提供しており、食材に付加価値を付けたこの販売方法は素晴らしい取り組みであると感じた。生産物の消費までトータルで考えることが重要であり、そのことが地産地消として「なな菜」で実践されていることが魅力的であると考え。行政としては、農家の生産支援を行うのみでなく、こういった取り組みを対外的にPRしていくことで消費の面からも支援を行っていくことが可能であると考え。

○ちんげん菜農家

農業体験として伺った山内町の農家では、米、大豆、麦に加えてちんげん菜を生産していっしやった。体験としてはちんげん菜の苗つけ及び種まきを行い、その他全体的なお話を伺うことが出来た。少子高齢化が進む武雄市では、年に数回収穫できある程度の手間で収穫できるちんげん菜の生産を始めていた。伺った農家は、耕作面積が広く生産品目が多い等、農業に対する取り組みが意欲的であるように感じられた。しかし、その現状は一部「地域を守る」ことが理由になっていることを伺った。耕作放棄地を作らないために、従事が厳しくなった高齢者農家の土地の面倒を見ている結果であった。生産形態としては非常勤のスタッフを雇って組織的に行うようになさっており、さらにこの生産方法が継続できるような組織構築を目指していっしやった。現在の農業の現状を把握しながら、継続可

能な農業を模索していらっしゃる取り組みを伺い、行政として補助金以外に何ができるのかについて考えさせられた機会であった。

○地域の方々の英知利用

河川事務所に伺った際に、毎年のように水害がある六角川領域において減災するための取り組みをしておられた。その際、河川事務所が単独で取り組むのではなく、その土地や川の様子について経験に基づく知識を有する地元の自主防災組織と協力していると伺った。また、農業体験で訪れた農家では、補助金を利用しながらも、自ら「地域を守る」ことを第一義にしてその土地でやっていくべき農業を考えておられた。これらの研修を通じ、全ての業務において行政が先頭に立つことよりも、財産としての地域の英知を利用すべきであることを実感した。

○病院経営

国立の療養施設を市民病院として引き継いでから10年目以降の経営について、武雄市としては病院の民間移譲を決定した。この決定は、市長のリコール・再選を含めて市内で大きな議論を経たことが興味深い。様々な議論を経た後、民間移譲することによって顕著な問題となっていた医師不足を解消でき、経営収支も大幅な赤字からは改善されたという。市内に病院を確保したい要望を市としてどのように実現するのかについて、住民の方、その他関係各所への説明が市として大きな役割であったと考える。その際、経営が赤字である実態や、医師が不足している状況等の問題点を明確にし、民間移譲によって解消され得る点を含めた説明が必要であったと思われる。さらに、民間移譲が決定した現在でも、耐用年数分の補助金返還等今後も住民への説明責任が残っているそうであるが、地域全体の医療体制を考えながら理解を得る作業が大変であることが感じられた。今後は一つの病院経営に関する業務ではなく、市全体の医療体制に関する方策に重点を置くことができるようになると考えると、行政としての役割がより発揮できるように思われる。特に、医療は市としての行政区にとどまらず、隣接地域との相互連携が重要になってくると考えられるため、広域の防災センターを有する武雄市は中心的な役割を担っていくのではないかと考える。

○市役所内、組織機構

研修全体を通じてのことであるが、市役所の職員の方々が「武雄」に貢献したい、「武雄」の良さを知ってもらいたいという熱意が大きいことが印象的であった。また、インパクトのある「営業部」、「レモンガラス課」等の名称を設定することで、何を行っているのかが明らかとなり結果として対外的に業務がしやすくなる利点を知り、興味深かった。さらに組織機構を再編し、「こども部」を設置する等、住民への透明性をアピールなさっており、住民へのサービスという第一義的な目的も果たされていると感じた。

3. 意見交換の中から

最後に研修、特に意見交換の中で感じた点について考える。

公務員と言っても、国家、都道府県、市町村での業務は大きく異なっている。今回の研修では、市町村の住民の方と直接接する業務を体験した。研修に臨むにあたっては、このように直接意見交換ができる等の経験は国家公務員としてとても貴重であると感じていた。しかし、このようなことが貴重であると感じる感覚は大切であるが、珍しい体験であってははいけないと実感した。農家の方や職員、市長のお話にもあったように「話す」機会を能動的に作っていかなくてはならないと考えようになった。研修後の討議において、「現場」とは、実際に種々の制度を利用する住民の方々を指す場合と、直接住民の方々に応対する市町村役場の方々を指す場合があるという議論になった。研修の中でも、

国が打ち出す施策が変わることによって「現場」が振り回されることになるため、施策の方針がぶれることのないようにしてほしいとの要望を伺った。こういった要望に加え、より具体的な要望を伺うことができるようなネットワークを個人的にも制度的にも構築していく必要があると考える。また、情報がスムーズに行き来出来るようなネットワークである必要であり、個人として話を伺える窓口を多く持っていることが強みになると考える。

また、市長を始めとする職員の方々とお話をさせていただいて、武雄市の魅力を理解しているからこそ意欲的に業務に取り組めていらっしゃる印象を受けた。例えば、組織機構が目まぐるしく変化する状況で業務しにくいと感じたことはないかとの問いに、市民の方にいいサービスを提供するための変化であれば構わないとおっしゃる職員の方がいらっしゃった。このことで、研修を始めた当初、近い立場である市役所の職員の方がどのように勤務していらっしゃるかにばかり意識が向いてしまっていたことを痛感した。さらに、「主役は市民」であることを職員の方々が認識していることに加え、住民の方への意識改革を行っていくとする意識を持っていらっしゃることを感じた。その一方で、住民の方の中には新しいことに対して反発を覚える方もいらっしゃるため、現状の暮らしに対する満足度をより大きくするためであることを伝えることに注力していらっしゃる様であった。また、さまざまなことへの参加や、体験の機会を「提案」することが行政としてやるべきことであるという考えを伺った。様々な選択の機会を住民の方に利用して頂き、その効果が実感されることでさらに他の機会へとつながってゆく、というように武雄市住民であることに誇りを持てるようにサポートすることを考えていらっしゃった。その際には「提案」の目的をはっきりと説明することが重要であり、これらの考え方は行政に関与するどの立場にも必要であると考えます。

4. 最後に

まずは研修の機会を与えて下さった多くの方々に感謝したい。今回、地方自治体の現状を市役所を介して拝見する機会を得たが、武雄市で行っていらっしゃる取り組みや職員の方々の考え方等興味深い点が多かった。また、全体を通して「情報」が一貫して重要であると感じた。情報をどう集めてどのように発信するのかによって、情報の伝わり方や業務の進め方が変わってくるという。情報を発信、収集する人間であることで、さらに情報が集まってくるようになると伺い、チャンネルを広げることが必要になってくると感じた。今回得た出会いを大切に、この研修で学んだ視点を活かし、「現場」の定義は様々ではあるが、現場から乖離することのない業務を行いたいと考える。